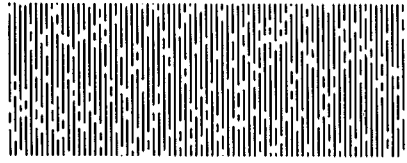


マディナ村(マリ)に住んで

著者	村上 一枝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1994-03
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008535

マディナ村に住んで



村上一枝

西アフリカ、マリ共和国の首都バマコから南に約200kmのところにある村で、地元NGOのスタッフとして、1993年8月まで村民と生活を共にした。約2年間、長いようで今思うととても短く感じられる。この村の正式な名前はマディナクルラミニ村といい、人口約1050人の農業を主としたバンバラ人の村である。

□人々の明るさ□

私が村に入り3カ月ぐらい過ぎた頃、村の若い男性、中年の男性などに「どうして村の生活は貧乏だと思うの？」と問いかけてみた。「親父が財産を残さなかった」、「トラクターがないから、短い、それも雨が少ない雨季にいろいろの種類の作物を耕作するのは無理だ」、「売りにいくにも交通手段もない」、「今はまあこれでどうにかいい。しかし、ときどき女房が病気になるので、その時の労働力のために第二夫人がほしい」などという答えがかえってきた。女性たちに聞くと、「なぜだろう。主人に言うと、けつとばされたりぶたれたりする。毎日毎日働いているのにどうして貧乏なのか分からないヨ」と言う。

本当にそうなのだ。彼女たちは本当によく働く。一日中働き、そして昼間時間があると裁縫教室に、夜は食事が終わると識字教室に通ってくる。私に

はとてもできない。完全に彼女たちに脱帽だ。しかし、貧乏だといっても、決して彼女たちは暗くない。とても明るい。悲しそうな惨めさなどみじんも感じられない。なぜなのか、と考えてみた。強い宗教的な土台があるようには見えない。モスクに行ったり、日中祈ったりしている女性は2〜3人しか見たことがない。明るく生きられるのは、自然と一体となり、さからわず何ごとにも素直に吸収できる素質を持った人たちだからではないだろうか。しかし私には、よくわからない。明るく、そして、私心などないかのように他人にも親切で、ともするとお節介な面もないではない。こんな姿は、かつての日本人にもあったような気がする。

□村の生活□

村の女性の家を訪れた時、「なんて家具が少ないのだろう」と思った。少ない調度品を器用に工夫し、大事に使っている。調度類は自然界から産出されたものが利用されているものが多い。石、木、実など上手に日常生活の什器として使われている。バンバラ語でフィレンと呼ばれるヒョータン的一种は、中をくり抜き真二つに割り、容器として使われる。大きいフィレンで直径30〜40cm、小さいので15cmぐらいである。これにヒビが入り、水が漏るようになると、傷口を外科医のように縫い合

小銭かせぎのためのフルフル
(揚げドーナツ)づくり



わせてくれる修理屋さんがある。これらは主婦の財産であり、誰誰さんの持ち物といわれ、決して何々家のものと言われたいのが面白い。また落花生をすりつぶすための紡錘形の石と、その台になるまな板状の厚い石、大きい木をくり抜いて作った脱穀に使うウスとキネも必需品だ。これらの道具は、この地方ではとても重要であるカリテの木の実の油を絞るのにも使われる。ウスとキネもサイズがさまざま、用途によって選ばれる。

村での主食はトウと呼ばれ、メイズのほかミレット(唐人ビエ)、フォニオなどの雑穀を粉にして、日本のソバガキのような状態にして、その季節に入手できる材料で作ったソースをつけて食べる。村の男性は、これらの主食になる作物の栽培と換金作物に関わる仕事は行なうが、その他の仕事はしない人が多い。ウロウロして1日を過ごしている。家族には主食だけ与え、その他のための金など与えないので、主婦は一人で自分の生んだ子どもの面倒を見なければならぬ。薬代、衣類、学用品や夫や子どもに食べさせるソースの材料までも工面しなければいけない。祭の時などの晴れ着は、親戚の金持ちや実家の母親が送ってくれるのが普

通である。主婦は金を工面するために、小商いをする。自分で作った落花生やカリテの油を売ったり、フルフルという揚げドーナツや、ソゴミと呼ばれるパンケーキを作り、2個5CFAフラン(約2円)ぐらいで売る。これらは、メイズやミレットを粉にして作られる。小麦粉は高価なためにあまり使われない。しかし、金が入っても自分のためにはほとんど使わず、子供のために消えていく。

□ 女たちの暮らし □

マリ共和国の人口の90%は、イスラム教を信仰している。そして、結婚する時の婚姻届に一夫一婦制か一夫多妻制か記入する箇所があるという。しかし、一夫一婦制と印を付けて婚姻届を出しても、いつのまにか一夫多妻制になっていることが多いという。この婚姻届も都市では行なわれていても、村では行なわれず何の登録もせず結婚している。ただ親戚、近所の人たちが集まり、唄い、踊って、終わりである。ある時、ある男の第二夫人となっている女性に聞いてみた。一人の男性を多くの妻が(言葉は適当でないかも知れないが)「所

有」して妻たちの間でもめごとはないのか、と。しかし、彼女はニヤリと笑っただけで、何も答えなかった。第4夫人まで持っている人は村にはいないが、第4夫人を物色中の60歳近い男性が一人いる。他の男性によれば、「1番目、2番目の奥さんは年齢も近い。しかし、3番目は極端に若い人をもろう。1番目、2番目は姉妹のように仲がいい。しかし、彼女らは3番目とはどうもうまくいかない」という。この男性の言うとおりに、女性たちが大勢で一緒に歩いているときや、識字教室に来るときなど、1番目と2番目の妻は仲良く一緒にくるが、3番目の妻はいつも一人で歩いているのをよく見かける。しかし、夫も大変であろう。3人の妻を公平に愛し、公平に金を与え、彼女たちの生んだ沢山の子供たちの面倒を見なくては行けないのだから。はたしてこのようなことが本当に可能なのであろうか、と疑ってしまう。

毎日の家事については彼女たちの他に、夫の死んだ父親の数人の妻や子供がいたりすると、大家族で主婦が大勢いることになるが、やはり夫の第1夫人が取り仕切っている。彼女たちは広い敷地内に各々の台所を持っている(年若い人は若い人に明け渡していることも多い)。このような家族では多くの女性たちはうまく話し合って、たいがい2日半(なぜ2日半なのかわからないが)のローテーションで家族の食事の準備をする。この当番の日に当たった女性は大変である。集会があっても祭があっても参加せず、ひたすら家族のための料理作りをする。朝食が終わると昼食、昼食が過ぎると夕食のため、夕食が過ぎると次の日の朝食の分とウスに入れた穀物をキネでつく音が絶え間なくトントンと聞こえてくる。家族内での食事の内容は、家長と女たちは異なることが多い。働かずグウタラしていても家長は家長であるから上等なものを食べている。金のある時は白米(この村でも

米を少し作っている)のお粥に、砂糖を入れて食べている。女性は一日の仕事が終わると、彼女の台所にしっかりと、地方独特のトカゲを彫った木の鍵をかけて寝る。ちなみに、この村で1年を通じて3食、何かを食べることのできる家庭は61世帯中のうち4分の1にも満たず、満足に食事をとれない家庭が多い。

―――] 変化の芽 [―――

私は村にきて、裁縫教室を開いた。数人の参加者で始めたこの教室で、技術を習得して小銭を稼げるようになった主婦は、その金で子供のための衣類、ソースの材料などを買ったりするようになった。しかしこれによって、一年を通じてコンスタントに収入を得るのは困難である。この教室がはじまった頃は、白い布が黒くなったり、針に糸を通すのも、それまでには経験がなかったので大変だった。しかし、今はミシンを踏み、ハサミを使えるようになり、型の整った衣類が作れるようになった。当初は、ミシンがこわれるのではと心配するぐらい力任せに使い、針を折り、糸を切り、その度ごとに「ミシンが悪い、こわれた」と私を呼びつけていた人たちも、自分で注意するようになった。使った後はミシン油を注ぎ、これを忘れた人には注意したり、糸をすぐ切る人にはその人に専用の糸を買えと言い、針を一本折ったら10CFAフラン(約4円)を出すことを彼女たちは自分たちで決めた。そして新しい衣類を作ると村を回り、売ることに努める。彼女たちは必死になり汗を振り払いミシンを踏んでいる。仕事に自信と誇りを持ち、新しいことにトライしている。刺繍をしたり、識字教育の本を手本として絵を描いている。私が裁縫教室をはじめて1年半しか過ぎていないが、彼女たちは予想以上に上達してくれた。技術

は優れているとはいえない。しかし今はこれでよしと思っている。

識字教室でも、長い文章をスラスラ書いたり読んだりできるわけではない。文字や文章に関心を示し、破れた服をリフォームして子供服に作り変え、街に出ると新聞を買ってくる。多分、彼女たちの心の中に、新しいことを知り、創作する喜びが沸き起こり、これらを通じて今まで知らなかったことに目覚め、そのことが村の女性の持っていた意識を少しずつ変え、ひいては発展へと連なっていくのではないだろうか。現在は、動き始めたばかりである。

過去長い間、教育の機会を与えられないで生きてきた人たちは、自分に潜在している能力を知らず、また自分の中に含まれている資質を知らなかったと思う。今、私が彼女たちと接するとき、でしゃばりすぎてもよくなく、あまり引込み思案になってもよくないと思う。どのようにして適切にアプローチするかは難しい。が、彼女たちの側に私を置いて、状況に見合ったことを探りだす手伝いをする。日本で習い覚えたことが必ずしも役に立ち、当てはまるとは限らない。アフリカ人の頭に切り換え、ともに考えともに行動することが大事であるように思う。うまく共存するためには彼女たちにへつらってもいけない。本心でしっかり互いに理解を深めるように努力しなくてはならない。

彼女たちの一生懸命に頑張っている姿を見、村や子供たちの将来を考えると、異なる場所に生まれた偶然で、なぜこのようにいろいろのことが違うのだろうかとても悲しく思う。病気になれば“死”を待つ生活、男性から「女はコココーラ 1 本の値段だ(日本円で約50円。現地では紙たば

こ 5 本ぐらいの値段)」とか「女は毛布だ」と言われる境遇から、女性が少しずつでも抜け出し、よりよい生活を送れるように協力することを考えている。

□おわりに□

今年2月、村民に慕われていた村長が、古木が朽ちるように静かに息を引き取った。ふせっている間、彼の部屋の土間には十分なゴザが敷かれていたわけではなかった。季節はまだ暑くなく、朝夕は冷え込む頃だったにもかかわらず、体の上には一枚の布がかけてあるだけだった。横には暖を取るための焚火がチョロチョロと燃え、煙が部屋中に漂っていた。私が見舞ったとき、彼は声にならない声で私に「アリガトウ」と言いうなずいていた。彼の元気な頃、私がお会いに行くと、私より年長であるのに、ていねいに挨拶をしてくれ、やさしく笑っていた。今は亡き村長の家の前を通る度に、そのことが思い出される。病院にも連れて行ってもらえなかったのだ。

村には、このような老人の死だけではなく、2歳になっても栄養不良が原因で歩けない子供、苦痛を訴えるだけで、何の処置も施されないで死んでいった女性、15歳頃の結婚が普通とされる村の生活で、結婚後、立て続けの出産により体に障害をきたした女性などなど、いろいろな不幸なことが起きている。このような状況を目の当たりにして、私は目をつぶっていることはできない。あまりにも、私たちの生きている環境と比べて、不公平さが大きいように思う。このように思うことは、単なる私のセンチメンタルな考えなのだろうか。

(1993年11月、マリ共和国で)

(むらかみ・かずえ/CARA-西アフリカ農村自立協力会)